

北朝鮮の天気——天気予報

二〇〇九年七月二日 00:10

ジメジメした蒸し暑さに突然降ってくる雨……梅雨って感じてすね。

朝は日差しが眩しかったのに、午後から急に降り出した昨日の大雨で私がつくづく感じたことがあります。同時に、私が昔の習慣からついやってしまう悪いクセも直さないと……と思いましたね。

日本の天気予報は驚くほどよく当たる!!!

半信半疑で傘を持たずに出て行った私は、学校の帰り道に雨に濡れてビショビショになるハメに……。朝起きたら咽喉が痛かった——。

日本で生まれ育つた方は、当たり前すぎて感じていないかもしれないし、もしかすると意識すらしたことがないかもしれませんが、天気予報が全然当たらない国もありますから^(^^)。

私が小さい頃、北朝鮮でもテレビやラジオなどで天気予報を伝えていました。

しかし、その天気予報が当たることはほぼなかったと覚えています。市内にあった「気象観測所」を通り過ぎるとき、ここにいる人たちはいったい何をしているんだろうな……と苦笑いしたことを今でも覚えています。

天気予報は形だけのもので、人々は昔からの経験と知恵で天気を予測し行動したと思います。

私が住んでいたところは都会なので、農村のように天気のことを特に気にすることはありませんでした。が、学校の課外活動で郊外に「農村支援」に行つた際、一時間歩いて行つたのに雨のせいで作業は何もできず、結局そのまま帰ってくるという……。 「天気くらいちゃんと当ててくれよ!」という気持ちもなくはなかつたんです……。

そういえば、十年ほど前に北朝鮮で初めて人工衛星を打ち上げたと報道されたとき、これからは正確な天気予報を伝えることができるという話があったと覚えています。テレビの報道からだつたのか、単なる噂だつたのか定かではありませんが、その人工衛星で気象観測もできるという話を聞いたことがあります。

そろそろ天気予報を当てにしないクセを直さないと……。天気予報は信じましょ!!!

金日成の死去——当時を振り返って(一)

二〇〇九年七月八日 22:50

今から十五年前の今日、一九九四年七月八日、当時の私たちには神様のような存在であつた「金日成首領様」が亡くなりました。

人間はいずれ死ぬ……。でも、私はそれまで「金日成首領様」も死ぬということを知らなかつたし、考えたこともありませんでした。そういう意味で、私にとって「金日成首領様」は本当に神様だったかもしれないね……。

金日成の死去について、そして、その追悼の様子などはメディアを通じて、見て知った方もいらつ

しやると思います。

ある知人が私に、「金日成の銅像の前でみんな泣いたりしてたけど、あれウソじゃない？」と聞いたことがあります、それは本当の姿でしたし、少なくとも私や同級生たちは本当に大泣きました。今思うと本当にばかげた話ですが、金日成が亡くなったから地球が減ぶのではないかと不安に怯えていた当時は、少し振り返ってみたいと思います。

金日成の死去——当時を振り返って(2)

二〇〇九年七月十日 0023

前回の続きです。

私が中学校に入って間もない頃だったと思います。当時の私は遊ぶことしか知らない十代前半の中学生でした。

一九九四年七月八日、お昼に近づく時間だったと思います。その日も私と友達は何で雑談しながら遊んでいました。

しかし、いつもならもう次の授業が始まる時間なのに、なぜか先生も誰も教室に来ません。

「これは自習だね(´)、やった!!!」とはしゃいでいると、担任の先生がいつもと全然違う顔で教室に入ってきました。そして、沈痛な面持ちで金日成が亡くなったと伝えました。

あまりにも突然だったので、私たちが「先生、冗談がきつすぎます。金日成大元帥様も亡くなるん

ですか」と言うと、先生は、本当だ。今テレビで報道が流れているんだと涙声で答えるのです。よく見ると、先生はすでに教務室で泣いたようで目が赤く充血していました。

私たちは言葉を失いました。

状況が尋常でないことには気付いたけれど、先ほど先生から告げられた話を自分の頭の中で整理するには衝撃が大きすぎて、真っ白になってしまいました。

これをどう理解すればいいのか……。教室は異様な静寂に包まれました。

しばらくすると隣の教室から泣き声が聞こえきました。その瞬間、まるでそれを待っていたかのようになり、一斉に泣き声が広がり、やがて学校全体が泣き喚ぎました。

私も泣きました。状況が理解できたわけではないが、ただただ涙が出ました……。

しばらく時間が経ちみんな少し落ち着くと、先生から、「金日成首領様の銅像に花束を捧げに行くので、一日家に帰って午後集合するように」と言われました。

私は家に帰って、金日成死去の悲報を伝えるアナウンスを聞き、改めて夢ではないことを実感することになったのです。

午後、学校に集合した私たちはいつも「金日成大元帥様は私たち朝鮮人民のお父様である」と言ってきたように、制服の左腕に黒い腕章をつけて、私たち全員が喪主であることを自覚しました。そして、金日成の銅像が立てられている広場に向かいました。

金日成の死去——当時を振り返って(3)

二〇〇九年七月十四日 00:32

少し時間が経ちましたが、前回の続きを書きます。
金日成も人間で、死ぬんだということをはじめて分かった私たちですが、これからどういことが起きて、私たちはどうすればいいのか、我が国はどうなるのか……。漠然とした不安を抱えていたことを今でも覚えています。

七月八日の午後、私たちは金日成の銅像が立てられている駅前の広場に向かいました。

何も話さないまま、お互い目を合わすのも避けながら黙々と歩いて広場に着いたら、そこには驚くような光景が……。ビックリするほど大勢の人々が団体で金日成の像の前に集まっています。その長蛇の列とあちこちから聞こえる哭声に、私たちも自然と涙が出ました。

三〇五列ずつ階段を上り、金日成の像の一番前に出て、花束を捧げては数分間黙祷をしますが、悲しみに耐え切れず泣き崩れる人々でしばしばストップしてしまいました。

「首領様！ 私たちをおいてどこに逝かれるのですか。戻ってきてください」と泣き叫ぶ人、昏絶して運び出される人……。私たちは悲しみのどん底に陥りました。

私たちの順番がきました。

私たちも献花して黙祷をしました。不思議なことに、その銅像の前に立つと涙が止まらなくなり、

泣きすぎて頭がボーッとしてくるのでした。クラスのひとりがるで念仏を唱えるかのように、「大元帥様、これからはもっと一生懸命勉強し、課外活動にも一生懸命に参加して模範学生になります。ですから逝かないでください……」と、ずつと話しかけていたことが思い出されます。これはのちに(いつの間にか)、「大元帥様、ご安心ください。私たちには金正日元帥様がいらつしやいます」に変わっていました……。

その夜から私たちは金日成の銅像に集まり、夜明けまで金日成(銅像)を守るという活動を行いました。夜中に外出を許されることなどめつたにない私たちですが、そのときだけは例外でした。夜に学校に集合し広場へ移動、金日成の銅像とその周辺を学生たちが囲み、夜明けまで守るのです。

他の学校も同じことを行っていました。一〇二m間隔に並んで、二時間以上ずっと立ったままでしたが、つらいとかやりたくないとか、そういう思いはありませんでした。そして、その活動は結構長い期間続いたと記憶しています。

金日成の死去——当時を振り返って(4)

二〇〇九年七月十六日 00:30

その頃は一日に数回、金日成主席の銅像を訪れていました。

やがて市内の花という花は全部銅像に捧げられ、私たちも全員が持つていく花束がなくて、交代で花束を準備しました。当番のときは何があっても花束を用意しなければならぬので、道端に咲いた

小さな野花を大きな葉っぱで包んで、大きく見せかけて花束を作った記憶があります。

夜空に金日成の笑顔が浮かんだとか、どこどこに虹が立ったとか、という数々の伝説も生まれま

た。テレビでは、悲報を受けて泣き叫ぶ国民の様子から、悲しみをこらえながら、金日成の葬儀の準備

だけでなく、数々の執務をこなす金正日の様子までが連日報道されました。「偉大なる首領金日成同志は永遠に我々と共にいらつしやる！」などの新しいスローガンが次々と作られ、国の至るところから、ただ悲しむだけでなく、金日成の遺業の達成を誓う姿が報道されました。私たち生徒も金日成の死去という現実を受け止め、金日成の遺志を継いで金正日を国の指導者として支えていかなければならないと、なぜか自然にそう思い始めたのです。

そのことに疑問を持ったことは一度もなく、気付いたら金正日がすでに私たちの上に君臨していたのです。信じ込まれるということは怖いものですね……。

ときは七〇八月の真夏で、暑い中で様々な行事を行った私たちには精神的にも肉体的にも大変な試験を与えられた一年となりました……。

私が日本に入国してすぐに、知人からある本をもらって読んだのですが、その内容があまりにも衝撃的でした。なんと、金日成は息子の金正日に殺された……!? その真実云々の話よりも、私にはそのフレーズがショックで、海外ではそのように見られ、書かれているんだということに衝撃を受けました。

私たちの悲しむ姿が外国の人からはウソに見えたというのもまた衝撃でしたね……。

私の涙を返して!!!

いよいよ期末試験に突入(…)

二〇〇九年七月十七日 06:31

やってくるのが怖くて仕方なかった七月……その原因である期末試験が始まります。実は語学関係の試験はすでに終わりましたが……。

私は、どうも順応力が低いみたいです。それとも、北朝鮮から中国へ、そして中国から日本へと流れてくる間にその順応力が完全に衰退してしまっただけ……。

まだ大学生活に全然慣れてないのに、様子見して、やっと体調を整えて……という間に期末試験はやってきたのです。

ああ、こりや大変だ……。

初めてのことで少し不安いっぱいだが、他の学生との交流もなく人脈もないものだから、聞ける人もいない……。今まで教科書を読むどころか授業に出るだけで必死だったのに……。要領もないまま今までもらってきた授業のレジュメと教科書を全部読むなんて無理だよ。先が真つ暗だ……。私がこんな弱音を吐くと、決まってこう言う人が出てきます。

「おい、あんなにひどい北朝鮮でも暮らしてたんだけ。川を渡って脱北までしたんだ。そのときの苦